

盆棚に関する活動からみる イエの盆行事の現代的な変化

—滋賀県甲賀市信楽町多羅尾の初盆を事例に—

湯 紹 玲

国立民族学博物館外来研究員

第1章 序章

第1節 研究目的と方法

本研究では、近年のイエの盆行事の変化を明らかにすることで、その性格を確認することを目的とする。これまでのイエの盆行事研究は、盆棚の祭祀場所と祭祀対象の変遷を論じるものが多かった^(注1)。近年、イエの盆行事では仏壇で精霊を供養することが多く、盆棚を作ることは少なくなっている。また盆棚が次第に室内に定着し、盆棚の祭祀場所の変化を考察するだけでは、イエの盆行事の変化を反映しにくい。そのため、祭祀主体であるイエと盆棚の作成、装飾、また周辺との付き合いなどの活動から考察することが必要である。一般のイエでは盆棚を作ることが減少しているなか、初盆のイエでは新仏を供養するために、仏壇と別に屋内で盆棚を作ることがよく見られる。イエの盆行事の性格を明らかにするために、本研究では初盆のイエの盆行事に注目する。初盆のイエの盆棚の作成、装飾、また周辺との付き合いの範囲の変化をとらえることによって、イエの盆行事の性格を明らかにする。

第2節 先行研究と本研究の研究視点

これまでのイエの盆行事研究では、盆棚に関する研究については多くの業績が蓄積されてきた。次にそれらの先行研究を紹介する。

(1)三種の精霊と盆棚の設置場所

盆行事の祭祀対象は先祖・新精霊・外精霊の三種類があると、柳田國男は『先祖の話』において述べている(柳田 1990 100～102)^(注2)。本研究ではこの三種の精霊を先祖・新仏・無縁仏と呼ぶ^(注3)。イエの盆行事では、精霊をまつために盆棚をしつらえる。盆棚の設置場所は屋外、縁側、屋内などがあげられる。柳田は、先祖を室内にまつことに対し、新仏の喪の穢れを先祖に近づけないよう、軒下に新仏のために別の荒棚を作ると述べている(柳田 1990 93)。柳田は室内の先祖棚が先にあり、その後、軒下の新仏の荒棚、さらに屋外の無縁仏の外棚、水棚などが増えていったことを推測している

(柳田 1990 126～127)。柳田は盆棚の設置場所の多様性から三種の精霊の歴史関係を述べているが、立証していない。伊藤唯真は、新仏・無縁仏は性格が不安定であるため、ともに屋外でまつられるのに対して、先祖はイエの中の盆棚でまつられるというように、三種の精霊の性格の区別が示されていることを述べている(伊藤 1995 137)。以上の研究は、盆棚の設置場所から三つの精霊を区別するものとして理解できる。

(2)盆棚の設置場所の変遷からみる祭祀対象の変化

最上孝敬は、上述の屋内でまつられるのは先祖であり、縁側や屋敷地内でまつられるのは新仏・無縁仏という説を踏まえ、次のように推測している。本来屋外の盆棚は先祖・無縁仏をともにまつたが、後に先祖は屋内でまつられるようになり、屋外の盆棚は仏教の教えによって無縁仏の専用棚として位置づけされたという(最上 1984 143)。

喜多村理子は、先祖が屋外でまつられる地域があり、屋外あるいは屋内でまつることを精霊の空間的な区別と判断することは疑問であると述べている(喜多村 1988 144)。先祖の祭祀場所は庭先、軒下、縁側、室内、座敷の中、仏壇の前とさまざまである。これらの現象は、先祖祭はすべて仏壇でおこなうことがパターン化されるまでの過渡的な形態であると、喜多村は述べている(喜多村 1988 162)。また、夏のある時期に屋外で何らかの霊をまつっていた民間習俗に、仏教的な先祖と無縁仏の概念が導入され、先祖は屋内へ、無縁仏は屋外において空間的に区別してまつられ、それとともに仏壇と位牌の定着により、先祖と無縁仏が屋内と屋外に空間的に両極化されたと、喜多村は述べている(喜多村 1988 166)。

高谷重夫は喜多村と同様に、三つの精霊の祭祀場所の区別は、各精霊の性格を示すものではなく、盆棚の設置場所が屋外から屋内へ変遷する過程を示すことを明らかにしている(高谷 1988 177)。しかし、屋外と屋内でまつられる霊に対して、それ以上の根拠はなく、やはりすべては先祖であると高谷は述べている(高谷 1995 62～63)。

以上の研究では、先祖が屋内、無縁仏が屋外にまつられることについて、先祖は穏やかな性格であるのに対して、無縁仏は不安定な性格であり、室外でまつられることは後に付与された解釈にすぎないと主張している。

(3)盆棚と仏壇の祭祀場所の変遷

仏壇は日常的な祭祀活動とイエの盆行事に使われるものである。仏壇は常設の棚であるが、盆の時期には精霊まつりの祭壇になり、盆棚に含まれるべきだと高谷が述べている(高谷 1995 6)。仏壇は屋内に定着しているため、盆棚が屋外から空間的に仏壇に接近することが注目されている。その両者の祭祀空間の変遷については、次のような研究があげられる。高谷・喜多村は、かつて先祖は屋外の盆棚でまつられたが、仏壇が室内に安置されて以後、先祖は仏壇あるいはその近くにまつられるようになり、屋外の盆棚は仏教の影響を受けて無縁仏をまつものになったと述べている(高谷 1988 192・喜多村 1988 158)。高谷は仏壇と盆棚の祭祀空間の関係を次のように類型化した。①屋内に仏壇、屋外に盆棚・②屋内に仏壇+盆棚、屋外になし・③屋内に仏壇(盆棚と仏壇の一体化)、屋外になし(高谷 1988 173～186)。①から②、③への順序で仏壇と盆棚の祭祀空間が変遷したと高谷は考えている。

以上のほかに、祭祀空間を提供する建物から考察する説もみられる。森隆男は高谷の説に賛同しながら、盆棚の室内化については、さらに屋内に祭祀機能を持つ部屋が誕生した背景があることを強調している(森 1996 74)。

(4)本研究の視点—初盆の盆棚に関する活動からみるイエの盆行事の変化

本研究では、これまでの先行研究に反映されていなかった盆棚に関する祭祀主体としてのイエの活動の変化に注目する。近年、イエの盆行事では、先祖と新仏は室内でまつられることが定着している。盆棚の設置場所の変化だけでイエの盆行事の変化を考察することは不十分である。仏壇が普及している現在、盆棚の作成が減少しているなか、本研究では初盆のイエの盆棚に着目する。初盆のイエでは新仏を供養するために新しく盆棚を設えることが多い。その盆棚の作成、装飾、棚参り、処分などの活動から、初盆のイエと一般のイエ・初盆のイエ同士・ム

ラとの付き合いの変化をとらえ、現代のイエの盆行事の性格を深めていく。

第3節 調査地の選定—滋賀県甲賀市信楽町多羅尾

本研究では、滋賀県甲賀市信楽町多羅尾を調査地にする。多羅尾は滋賀県の最南端に位置し、南東は三重県上野市と境界をなし、西南は京都府相楽郡と境界線をなしている(図1)。海拔約400メートルから600メートル余りの高地性盆地にある山間集落である。

現在、多羅尾は静かな山間集落であるが、歩行や馬・籠に乗る時代には、山城国・伊賀国・伊勢国につながる交通要所であった。京都方面から伊賀国・伊勢国に行くには多羅尾を通して、御斎峠を越え、伊賀国の上野に出る方法が近道であった(杉原 1985 6～7)。1582年に、後の江戸幕府の初代将軍となった徳川家康は、本能寺の変で京都から逃げ出し、多羅尾の豪族の多羅尾氏の保護を得て、御斎峠に出て、無事に伊勢国白子浜へ到着したといわれている(杉原 1985 54～55)。現在では、御斎峠において「家康伊賀越え」の遺跡地が残っている。1603年に徳川家康は征夷大将軍に任ぜられ、江戸に幕府を開いた。1638年に江戸幕府は多羅尾家16代目の光好を代官に任命し、多羅尾家の屋敷内に近畿地方の天領を治める役所を設置した(杉原 1985 67)。これが多羅尾代官所のはじまりである。多羅尾家の家来のうち、文書の読み書きのできる学問がある人、耕地の測量や河川・道路の工事の技術がある人は幕府に雇われて役人となった(杉原 1985 67)。その時から、江戸やそのほかの土



図1 多羅尾の位置図(著者作成)

表1. 多羅尾の盆行事の資料一覧表

番号	時代	参考資料名
①	1750年(寛延三年)	「寛延三年改多羅尾村年中行事」 元庄屋佐野家文書 杉原信一氏提供 (原 良輔編 1977 『多羅尾の民俗』中京大学第14号) 中京大学郷土研究会
②	1804～1831年(文化文政年間)	竹内利美・原田伴彦・平山敏治郎編 1969 「近江國多羅尾村風俗問状答」(『諸国風俗問状』『日本庶民生活史料修集成』第9巻 風俗 三一書房)
③	1964年(国学院大学の民俗調査)	国学院大学民俗学研究会 1976年再版 『民俗探訪 青森県下北郡東通村尻屋ほか・滋賀県甲賀信楽多羅尾・福島県信夫郡飯坂町茂庭』国学院大学民俗学研究会
④	1977年(中京大学の民俗調査)	原 良輔編 1977 『多羅尾の民俗』中京大学第14号 中京大学郷土研究会
⑤	2014・2015年(筆者調査)	筆者が調査した内容

地から多くの役人が来て住むようになった。商人や武士たちの出入りも盛んになって、小さな城下町として栄えた(杉原 1985 66)。

文化文政年間に幕府の国学者である屋代弘賢が風俗問状という質問書を作り、全国各地に配布して、その地方の答書を求めた(注4)。その質問書の内容は江戸の生活を標準とし、年中行事や冠婚葬祭の各項目を作り、諸国の風俗の異同をはかるものであった(竹内・原田・平山1969 453～454)。その当時の7代目の多羅尾代官であった多羅尾氏純は質問書に応じて、「近江國多羅尾村風俗問状答」を書いた(杉原 1985 71・78)。「近江國多羅尾村風俗問状答」では、盆行事を記載し、それは後の盆行事の変化を明らかにするために貴重な資料を提供している。1964年・1977年、国学院大学・中京大学の民俗調査団が多羅尾において詳細な民俗調査をおこない、盆行事に関しては調査時の様子を詳細に記録していた。以上の資料を表1に整理する(表1)(注5)。

多羅尾を調査地にする理由は、以上の豊富な民俗調査報告によるものである。それらの資料に基づいて、多羅尾のイエの盆行事の変化を明らかにすることが可能である。

第4節 多羅尾の概況

多羅尾では、現在約165軒のイエがあり、人口は400人前後である(図2)。区内には、浄願寺という檀那寺があり、宗派は浄土宗で

ある(注6)。区内の檀家は約130軒であり、ほかのイエは天理教の信徒となる。区内は、上出・西出・中野・下出・茶屋出・新出と、6組に分けられる(注7)。図2は、西出、中野、下出、茶屋出の一部が入っているものである。住宅が一番密集するところでは中野組であり、多羅尾小学校、公民館、里宮神社、浄願寺、郵便局があり、区を中心とする。区内の主な川は大戸川である。墓制は両墓制である(注8)。埋め墓はサンマイといい、中央の山にある。参る墓を石塔場といい、浄願寺の裏にある(原編 1977 97～98)。次に2015年の盆行事の内容をイエ・ムラ・初盆のイエという祭祀主体にわけて紹介する。

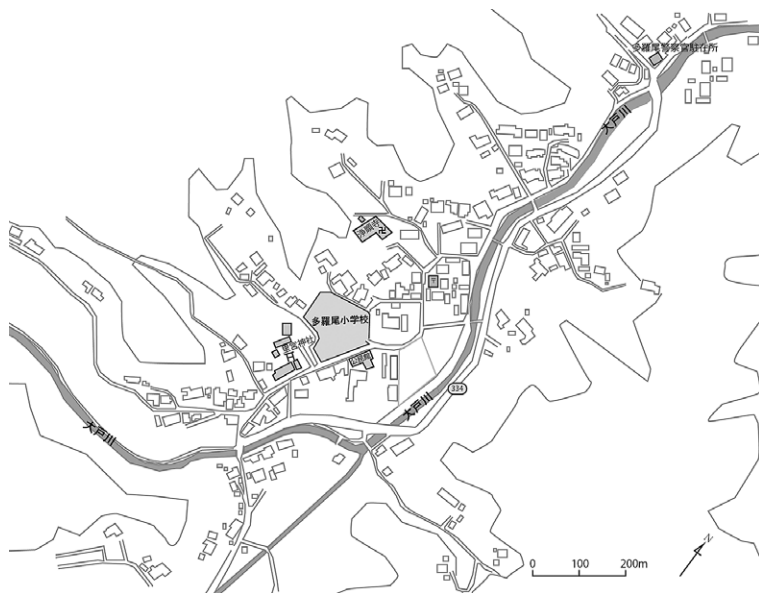


図2 多羅尾の住宅地図(一部)(筆者作成)

第2章 多羅尾の現在の盆行事

第1節 イエの盆行事

多羅尾では、一部のイエは天理教の信徒にもかかわらず、すべてのイエで盆行事がおこなわれる。8月7日から墓掃除や墓参りをはじめ。サラリーマン家庭が増え、土・日にすることが多い。8月13日朝、各イエの人々は浄願寺の石塔墓に参る。午前各イエの近くの川辺に砂台を作る。一部のイエでは、付近の川辺、屋敷地の庭先、井戸の三カ所で砂台を作る場合がある(写真1・2・3)^(注9)。ナスとキュウリなどの野菜の刻みを里芋の葉に載せ、コロコロ団子を柿の葉に載せ、それらを砂台の上に載せる。両側に供花を入れたプラスチックの筒を立てる。これは精霊を迎える準備である。13日の夕方に各イエの人々は、川辺の砂台の近くで精霊を迎える(写真4)。集落の中央を流れる大戸川の川辺で精霊を送迎するイエが多いが、大戸川から離れたイエでは、自宅の庭先、門口、近くの道で精霊を送迎

することもある。迎え手は家族全員や夫婦、または年配の女性などそれぞれである。竹の先端にジンジ松を括った松明1本を川辺に挿し、火をつける。家族がそろって鉦を敲きながら、経を唱える。線香に火を移して仏壇に入れる。仏壇の前において、家族全員が経を唱え終わると、精霊迎えが完了する。

仏壇に供える供物はボタモチ、キュウリ、ナス、カボチャの煮物、ソウメン、スイカなどがある。精霊を送るまでに、仏壇と砂台の供物を毎日3回入れ替える^(注10)。14日～15日の間に、浄願寺の住職は各イエを回り、仏壇の前で棚経をおこなう。

8月15日夕方、各イエでは精霊を送る。仏壇と砂台から下げた供物を持っていく。竹の先端にジンジ松を括った松明1本を川辺に挿し、火をつける。家族がそろって鉦を敲きながら、経を唱える。以上が精霊送りとなる。供物は以前は川に流していたが、環境汚染となるため、約20年前から禁止された。現在では、持ち帰りゴミとして処分する。イエの盆行事は精霊送りをもって終わる。



写真1 川辺の砂台(多羅尾・2015・著者撮影)



写真2 庭先の砂台(多羅尾・2015・著者撮影)



写真3 井戸の砂台(多羅尾・2015・著者撮影)



写真4 イエの精霊迎え(多羅尾・2015・著者撮影)

精霊を送迎する松明については、以前は各イエで2本の竹を十文字にし、上、左、右にジンジ松を括りつけ、十文字の松明を作った。近年は1本の竹にジンジ松を括りつけるだけで、簡単に作るようになった。ロウソクで代用する場合もある。現在、初盆のイエだけは十文字の松明が作られる。

第2節 ムラー同の盆行事

(1)盆行事の清掃作業

多羅尾では、毎年8月に入ると、盆行事の準備をはじめ。8月1日に浄願寺の総代とムラの役員が寺の境内を清掃する。8月2日に仏教婦人会の会員とムラの役員が、昭和大水害でなくなった災害死者の墓地を清掃する^(注11)。

(2)経木の受付

8月12日から浄願寺では、施餓鬼会において使われる経木の受付がはじまる。経木とは、薄い板に「施餓鬼」や「大施餓鬼」と、供養される対象、施主の名前を書くものである(写真5)。主な供養対象は、各檀家の先祖代々と新仏にわかる。また、自由に供養する「水子之精霊」、「殉国之英霊」、「水難之英霊」という経木もある。檀家同士は自家の先祖代々と新仏を供養するだけではなく、区内の近隣や親戚、または親交のイエの先祖代々や新仏のために、経木を注文して相互に供養する。平均すると、1軒のイエは8枚程度の経木を供える。多い場合には1軒のイエが数十枚の経木をもらうこともある。毎年注文される経木は2000枚以上になる。経木には、供養対象のイエの名前と、施主の名前が記入される。記入作業は寺の評議員と奉仕者によっておこなわれる(写真6)。記入済みの経木はイエごとに束ねられ、施餓鬼会の後に各イエに配られる。

(3)ムラの接待

2015年には、浄願寺の石塔墓へ墓参りに来る人々のために、ムラでは一日の無償の接待をおこなった。8月13日朝から午後3時半まで、草の根ハウスの前において、傘とテーブルが設置され、接待場所が設けられた。多羅尾区の区役員と各団体の長がスタッフをつとめた。だれでも無料で飲み物や軽食が取れる。地域活性化につながるためにおこないはじめたという。初回の接待は好評であったため、翌年にもおこなう予定である。



写真5 経木の種類(多羅尾・2015・著者撮影)



写真6 経木を書く奉仕者(多羅尾・2015・著者撮影)

(4)施餓鬼会

8月16日に浄願寺の本堂において施餓鬼会がおこなわれる。その日の早朝に総代が寺の本堂の入口に施餓鬼棚を設置する(写真7)。施餓鬼棚の四角に笹を挿し、笹に施餓鬼旗を吊るす。棚は階段式である。一番上の段に三界萬霊碑、前に蓮の葉に御飯を載せ、御飯にメシバタを挿す。ロウソク台、経木を立てる箱、水たらいに水かけ用のしきみを置く。本堂の真ん中に本尊に背を向いて住職の椅子と経木台が設置される。

多羅尾の施餓鬼会は三つの部分にわかる。朝8時から10時までは村中施餓鬼会、10時から午後4時までは初盆の施餓鬼会、午後4時半から5時半までは通常施餓鬼会である。次にそれぞれの施餓鬼会を説明する。

①村中施餓鬼会

朝8時から10時まで、村中施餓鬼会がおこなわ

れる(写真8)。住職、寺の役員(袈裟輪をかけた人)が集まり、浄願寺の檀家の過去帳を出し、読経をしてすべての死者を供養する。

②初盆の施餓鬼会

午前10時から午後4時までは初盆の施餓鬼会の時間となる(写真9)。初盆の施餓鬼会はイエごとにおこなわれる。遺族と親戚は、決まった時間に本堂に集まる。住職が読経しながら新仏供養の経木を施餓鬼棚の箱に入れ、しきみで経木に水かけをし、施餓鬼棚の前で焼香する。後に遺族と親戚が1人ずつ施餓鬼棚の前に進み、住職の作法に倣う。初盆の施餓鬼会は1軒ずつ30分であり、終ると、次の初盆のイエの遺族らと入れ替わる。寺の総代は、施餓鬼棚で供養済みの経木を初盆のイエの遺族に配る。遺族らは経木を新仏の祭壇で供養する。夕方になると、庭で焼却する。20年前には経木は川に流したという。

③通常の施餓鬼会

午後4時半からは通常の施餓鬼会である。通常の

施餓鬼会は一般のイエの先祖供養のためのものである。寺の役員を中心におこなわれる(写真10)。各イエの人々は現在は参加しない。住職が読経を終え、寺の役員は各イエが出した経木を一軒ずつ配りに行く。イエの人はそれらの経木を仏壇で供養し、夕方になると、庭や門口で焼却する。20年ごろ前には経木は川に流したという。

(5)盆踊り

8月19日夜、多羅尾小学校のグラウンドで盆踊りがおこなわれる。ムラの人々皆が参加する。

(6)地藏盆

8月24日に地藏盆がおこなわれる。以前は組ごとに子どもたちが集まり、地藏があるところで鉦と太鼓をたたき、大人に菓子と小銭を求めていた。現在は子どもの数が少なくなったため、公民館の前に1つのテントを立て、まとめておこなわれるようになった。テントの中に阿弥陀仏の掛軸、初盆のイエ



写真7 浄願寺の施餓鬼棚(多羅尾・2015・著者撮影)



写真8 村中の施餓鬼会(多羅尾・2015・著者撮影)



写真9 初盆の施餓鬼会(多羅尾・2015・著者撮影)



写真10 通常の施餓鬼会(多羅尾・2015・著者撮影)

が寄付した提灯^(注12)、蓮華が飾られる。子どもたちは午前中に地蔵の周囲を掃除する。その後、グラウンドでゲームをしたり、菓子を食べたりして夜まで遊ぶ。テントの中は、一日空になっており、子どもの姿はみられない。子どもの親は料理を作ったり、現場を片付けたりするために1日奉仕をする。

(7)初盆の灯籠供養

8月24日夜7時に浄願寺の本堂で初盆のイエの遺族が集まる。初盆のイエは、祭壇の飾り灯籠を寺に寄付する。飾り灯籠は本堂の真ん中に掛ける(写真11)。その日に、本尊に向かって通常の年忌用の供養棚が設置される。住職が読経し、念仏団の女性が念仏を唱える(写真12)。その間に、初盆のイエの遺族が次々と焼香する。その後、本堂の電気が消され、遺族らが飾り灯籠の美しさを観賞する。最後、遺族代表が自治区や寺に今年の初盆の協力への謝辞を述べる。各初盆のイエの遺族らが解散する。飾り灯籠は寺に納められる。住職は飾り紙をはがし



写真11 初盆の灯籠供養(多羅尾・2015・著者撮影)



写真12 念仏団(右の奥)(多羅尾・2015・著者撮影)

て焼却し、枠組みを倉庫に納める。その枠組はまた来年度の初盆のイエに貸し出される。

第3節 初盆のイエの盆行事

(1)初盆のイエの寄合

多羅尾において、初盆のイエでは新仏を供養するために特別な祭壇を設ける。2005年ごろから区自治会では、初盆のイエの寄合を開催するようになった。それには宗派にかかわらず、初盆を迎えるすべてのイエが参加する。その初盆のイエの寄合は、30年ほど前の生活改善運動の影響で、行事の簡素化をすすめるためにはじまったものである。盆行事のまつり方が派手すぎないように、飾り物、参加者などが決められるようになった。聞き取りで把握した初盆のイエの寄合がはじまった理由は次のように整理できる。①以前の初盆供養は祭壇や飾りものが派手すぎ、浪費が多かった。②盆に帰省する人や、初盆に来る親戚の飲酒運転をなくすように、初盆の参加者や接待のメニューまで簡素化する。③現在の若者は初盆供養の仕方がわからない。

現在では、盆月に入る前に、多羅尾公民館2階の会議所において初盆のイエの寄合が開催される^(注13)。2015年は7月8日夜8時からおこなわれた。自治会の役員と初盆イエの各遺族代表が集まり、「初盆家申し合わせ事項」を説明する。その内容は大体次の3つにまとめられる。まず、祭壇の周辺の装飾物の規定である。多羅尾自治区の初盆を代表する飾り灯籠は自分で作ることを禁止されているが、親戚からは贈与できる。次に、組内と区内の付き合いの規定である。最後に、初盆のイエごとの費用と初盆のイエ同士の費用の規定である。初盆のイエは「初盆家申し合わせ事項」にしたがって、親戚、組内、区内、初盆イエ同士と付き合いながら、初盆を遂行する。「平成27年度 初盆家申し合わせ事項」の内容は表2に整理した(表2)^(注14)。

(2)初盆の祭壇と棚参り

初盆のイエでは、8月12日に座敷に新仏供養のための祭壇を設ける(写真13)。それは盆棚のことである。祭壇は、葬式の時に葬儀ホールから提供される3段の階段式のものがあるが、座敷のスペースや周辺の装飾物の都合によって、5段の高い階段式の祭壇を使うことが多い。5段の階段式の祭壇を持たないイエはそれを持っているイエから借りる。祭

表2 「初盆家申し合わせ事項」内容一覧

項目	内容
装飾物	初盆の祭壇周辺の装飾物の数が限定され、自分で飾り灯笼を作ることが禁止されるが、親戚からもらうことは禁止されない。
組内	①13日に寺の本堂での精霊迎えは身内に限り、近隣への呼びかけはしない。②組内の棚参りは各組の判断とする。
区内(ムラ内)	①区内からのご霊前へのお供えは辞退しよう。②棚参りの返しはしない。③区役員の参りは廃止。④寺は従前の通りに参りがある。⑤子どもの地藏盆祭に不要となった提灯を自治区に寄付する(公民館に納める)。
経済的(初盆のイエ各自)	①13日に使う弁当は3000円以内のもの。②棚参りの接待はお茶のみ。③12日～13日のご霊前の返し(子どもへの駄賃)は200円程度。④詠唱講への接待はお茶、おしぼり、包菓子とする(15～16人分)。⑤13日に寺での精霊迎えのため、寺への布施は一軒ごと10000円以内。
経済的(初盆イエ同士)	①初盆イエ一同で寺へ盛籠1対を出す。②初盆イエ一同で各初盆イエに来る詠唱講(念仏団)への御礼10000円を出す。③地藏盆に、初盆イエ同士は寺への盛物、布施30000円とし、詠唱講(念仏団)への御礼10000円とする。④地藏盆に初盆イエ一同で灯笼1対を寺に奉納する(灯笼がない場合は取りやめる)。⑤初盆イエ同士のお供えとご霊前はしない。



写真13 初盆の祭壇(多羅尾・2015・著者撮影)



写真14 初盆の祭壇の供物(多羅尾・2015・著者撮影)

壇は仏壇の近くに設置される。精霊が縁側から通れるように、縁側のドアを開けておく。一番上の段の真中に新仏の位牌がある。その下の段に、遺影、紙の花、供物がある。お膳には、ミョウガで作った鶴、シイタケで作った亀、ナスびで作った牛とキュ

ウリで作った馬がある。これは親戚が持ってくるのが普通である(写真14)。

祭壇の周辺に戒名提灯^(注15)、飾り灯笼^(注16)、回転提灯、蓮華、盛り籠がある。回転提灯、蓮華は葬式の時に使ったものである。戒名提灯と飾り灯笼は初盆に親戚から贈ることが多い。戒名提灯はリサイクルで、それを持つイエから借りるものである。その枠組みを三重県伊賀市の業者まで持って行き、戒名の部分を新しく張り直してもらう。以前、親戚や近隣の人々は祭壇の装飾を手伝ったが、近年「初盆家申し合わせ」の規定内容にしたがって、近隣の人々は手伝わなくなった。

12日に区内のイエの子どもは初盆のイエを訪ね、霊前を持って行く。これを棚参りという。初盆のイエでは、棚参りに来る子どもに駄賃をあげる。近年、子どもがいないイエは大人が棚参りに行く。棚参りは、以前は区の範囲でおこなわれたが、現在は組内に限られている。

(3)初盆の精霊迎えと精霊送り

13日朝、初盆のイエでは浄願寺の石塔へ墓参りをする。午後2時から5時半まで寺の本堂において、初盆のイエの精霊迎えがおこなわれる。2015年には、11軒の初盆のイエがあった。新仏がこの1年間でなくなった順に、初盆のイエが1軒ずつ順番に本堂で精霊迎えをつとめる。1軒のイエの時間は約20分間である。初盆のイエの遺族と親戚は、喪服姿で決まった時間に寺の本堂に集まる(写真15)。住職は本尊に向って読経する。読経が終わると、寺の総代があいさつして終了とする。次の初盆のイエの遺族が入替わる。本堂の右側に受付の窓

口があり、初盆のイエの遺族が来ると、そこで待機する。本堂での精霊迎えを終えた遺族たちは、帰ると本番の新仏供養をはじめる。親戚は盆行事の間に初盆のイエに集まって初盆供養の作業を手伝う(写真16)。14日に住職と寺の総代が初盆のイエをまわり、祭壇の前で棚経をあげる。また詠唱講の念仏団も初盆のイエを訪ね、祭壇の前で詠歌を唱える。遺

族は「初盆家申し合わせ事項」にしたがって、茶で接待し、御礼を出す。

15日夜10時に初盆のイエでは精霊送りをする。一般のイエの精霊送りより遅くなる。送る前に、遺族と親戚が祭壇の前に集まって読経する(写真17)。その後、精霊送りをはじめ。祭壇に飾った提灯と供物を持つ人、鉦をたたく人、十文字の松



写真15 初盆の精霊迎え(多羅尾・2015・著者撮影)



写真16 初盆のイエの親戚(多羅尾・2015・著者撮影)



写真17 精霊送りの前に念仏(多羅尾・2015・著者撮影)



写真18 十文字の松明(多羅尾・2015・著者撮影)



写真19 初盆の精霊送りの行列(多羅尾・2015・著者撮影)



写真20 初盆の精霊送り(多羅尾・2015・著者撮影)

明を持つ人など、一列で10数人となる(写真18・19)。近くの大戸川の川辺まで行き、松明を灯してそこに挿す。コロコロ団子と提灯を川に流し、その場で読経して精霊を送る(写真20)。現在では、大戸川が浅く、供物と提灯を流すとすぐ引っかかる。翌日に遺族はそれらを拾って処分する。精霊送りが終わると、遺族は座敷において、酒、料理や菓子などで親戚を招待する。

(4)初盆の施餓鬼会と灯籠供養

16日に浄願寺では施餓鬼会をおこなう。午前10時から午後4時までは初盆の施餓鬼会の時間となる。24日夜7時に初盆のイエの遺族らが灯籠供養に参加する。それらの内容は前節を参照する。

第3章 盆棚からみる初盆のイエの盆行事の変化

第1節 江戸末期の新仏の盆棚

盆棚とは、盆の時期に精霊まつりのために特別にしつえられたすべての祭壇である(高谷1995 5～6)。本節では、新仏をまつる盆棚の変化に注目する。江戸末期の「近江國多羅尾村風俗問状答」では、新仏の盆棚について、次のような記録がある(図3)。

「新霊は別に棚を設く、其形凡高さ六尺にて、屋根四方とも青檜葉・青竹にて製す。家檐の邊に營み、麻からのほしごをかくる也」(竹内など編 1969 655)。江戸後期の多羅尾における初盆のイエでは、軒下に盆棚を設けていたことがわかる。図3が示すとおり、足が長くて屋根つきの棚であった。現在、多羅尾では、このような棚で新仏をまつることはみられず、階段式の祭壇が普通である。

新仏の盆棚の変化について、前章にあげた資料と筆者の調査結果によって表3のようにまとめることができた。次に表3に基づいて盆棚の様式と設置場所・周辺の装飾物・新仏のシンボル・作成と処分の変化を検討する(表3)^(注17)。

第2節 盆棚の様式と設置場所の変化

以前は新霊の棚と呼んだが、現在ではアラボトケの祭壇と呼ぶ(表3の「名称」を参照)。盆棚の高さは2メートルであった。足が長くて屋根付きのものであり、隠蔽式の形であった。それほど場所を取らないことがわかる。祭壇の高さは1.2～1.5メー

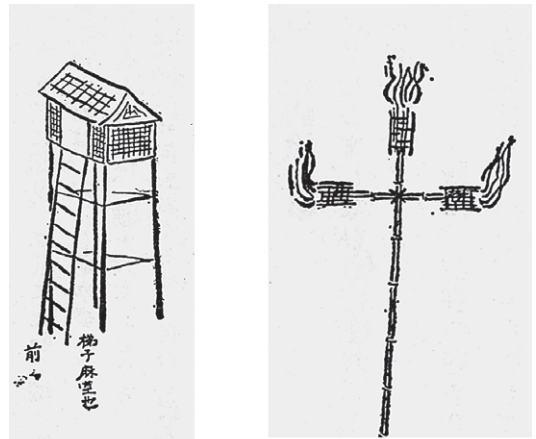


図3 「近江國多羅尾村風俗問状答」に掲載した盆棚と松明
(出典：竹内など編 1969 655)

トルであり、階段式の祭壇ではよく見せるように段々に供物や飾りものを供える。必要な場所は広くなった(表3「高さ」参照)。

屋根付きの祭壇は1955年ごろにまた存在していた。筆者の聞き取り調査では、屋根は木で枠を作り、銀色や金色の紙を貼り付けたという。精霊送りの際に、屋根は大戸川に流していたという。1953年に多羅尾では甚大な水害が発生し、その後、大戸川は河川改修で広くなった。水位が浅くなり、屋根が流されると、川辺に引っかかり、環境汚染にもなるため、屋根を川に流すことが禁止された。後に初盆のイエでは、祭壇に屋根を作らなくなった(表3「屋根」参照)。

設置場所については、以前は軒下に設けられたが、1955年にはすでに室内(座敷)でまつられるようになっていた。表3の「麻がらの梯子」という項目では、資料③国学院大学の調査によると、祭壇から仏壇まで麻がらの梯子をかけたという(表3「設置場所」参照)。これは、新仏の祭壇と仏壇の連続化が進んでいることを示している。筆者が2014・2015年に取材した内容によると、初盆の階段式の祭壇は仏壇のすぐ横に設けられていた。仏壇の扉が開けたままであり、ホトケサンが自由に仏壇や祭壇の間で遊べるという話もあった。

表3 初盆の盆棚の変化

年代 項目	1804～1831年 (資料②)	約1955年 (筆者の聞き取り)	1964(資料③・国学 院大学の調査)	1977年(資料④・中 京大学の調査)	2014・2015年 (⑤・筆者調査)
名称	新霊の棚	アラボトケ祭壇	アラボトケ祭壇	アラボトケ祭壇	アラボトケ祭壇や初 盆の祭壇
高さ	6尺(約2メートル)	1.2～1.5メートル	麻がらで三段に作る	1.2～1.5メートル	1.2～1.5メートル
屋根	あり	屋根がある。5段の祭壇の一番上に屋根があった。屋根は木で枠を作り、銀色や金色の紙で貼り付けた	なし(階段式)	なし(階段式)	なし(階段式)
設置場所	家檐の邊に營む(縁側)	室内(座敷)	室内(座敷)	室内(座敷、仏壇の横)	室内(座敷、仏壇の横)
麻がらの梯子	地面から屋根の下の段までかける	三段目から一番上の段の位牌までかける。	祭壇から仏壇まで麻がらで梯子をかける	祭壇の階段に掛ける	二段目から掛ける(現在、掛けるイエは少ない)
飾り物	屋根四方とも青檜葉・青竹にて製す	両側に戒名提灯、飾り灯籠があった	出来る限り立派なものを設けなければならない	両側に戒名提灯、飾り灯籠、回転提灯、蓮華など	両側に戒名提灯、飾り灯籠、回転提灯、蓮華など。(しかし、今年は5分の1の初盆のイエだけで戒名提灯、飾り灯籠を飾った)
位牌	不明	ある。屋根のすぐ祭壇の一番上の段に位牌がある	位牌がある	祭壇の一番上の段にある	祭壇の一番上の段にある
遺影	なし	不明	不明	ある	ある
遺骨	なし	なし	なし	なし	遺骨をまつる
作製	不明	大工や自家製、隣人から貸出	自家製	自家製や隣人から貸出	葬儀会社が提供、隣人から貸出
処分	不明	①屋根は川に流した自家の枠組みを収納する②貸出のものを返却する	不明	自家製や隣人から貸出	①葬儀会社が提供したものを焼却する②貸出のものを返却する

第3節 周辺の装飾物の変化

盆棚の周辺の装飾物は、江戸末期は、屋根四方とも青檜葉や青竹によって作られた。後の祭壇は、両側に戒名提灯と飾り灯籠、回転提灯、蓮華などが飾られるようになった。1970年代に仏壇はすでに立派に飾られるようになったことがわかる(原編 1977 写真の部分)^(注18)。現在の祭壇の飾り方はそれほど変わっていない(写真13参照)。戒名提灯は新仏の戒名を入れた長い提灯であり、その枠組みを旧家から借りる場合が多い。以前多羅尾には、飾り灯籠を作る専門的な職人がおり、親戚や親交のある隣人が金を出して注文した。後に職人がいなくなり、親戚や隣人が自分の手で作らないといけなくなった。近年、行事の簡素化によって、葬式用の回転提灯、蓮華しか飾らなくなった。戒名提灯と飾り灯籠の使用は大幅に減少している。飾り灯籠は柄の模様が複雑であり、紙型の模様がないと作れない。技術の煩雑の面もあり、2015年に飾り灯籠を飾る初盆のイエは11軒のうち、2軒しかなかった。

第4節 新仏のシンボルの数の増加

(1)位牌

新仏のシンボルについて、江戸末期の盆棚に新仏の位牌があったかどうかは不明であるが、新仏の位牌が1955年にすでに祭壇の一番上の段でまつられていたことがわかる(表3「位牌」参照)。

(2)遺影

江戸末期の盆棚にはもちろん遺影の記録はなかったが、1977年の調査内容で確認できた(写真4-25)(表3「遺影」参照)。

(3)遺骨

多羅尾では10数年前から火葬となった。初盆の祭壇において、位牌と遺影に遺骨を加えてまつるようになった(表3「遺骨」参照)。

第5節 作成と処分の変化

盆棚の作成については、江戸末期は不明であるが、祭壇の場合は、大工さんに作ってもらったり、

自家製作したりしたという。あるいは、それを持っている隣人から貸してもらった。近年、葬儀会社が初盆用の祭壇を提供するようになり、それを使うイエが増えた(表3「作成」参照)。

盆棚の処分については、江戸末期は不明であるが、檜の葉や竹の葉、または麻がらの梯子などの材質からみると、盆行事が終わると、処分された可能性が高いと考えられる。1955年の祭壇は、屋根付きの場合は、屋根だけを外して大戸川に流したが、その本体の枠組みは収納したり、あるいは隣人に返却したりした。現在では、貸出のものは隣人に返却するが、葬儀会社が提供したものは盆行事の後に焼却する(表3「処分」参照)。

第6節 小結

以上の初盆の盆棚の変化からイエの盆行事の変化を次のようにまとめることができる。

- (1) 屋根付きの隠蔽式から、祭壇のような開放式に変化し、周辺に飾り灯笼や提灯が飾られ、見せる工夫がみられるようになった。
- (2) 設置場所は縁側から室内に変化し、さらに、祭壇と仏壇の連続化が進んでいる。
- (3) 新仏のシンボルが位牌・遺影・遺骨に変化したことは、イエの盆行事における祭祀対象の限定化を示している。死者祭祀が明確化されている。
- (4) 祭壇は葬儀会社によって商品化され、イエの経済力が強調される。
- (5) 飾り灯笼は、親戚や隣人の金銭や技術の互助を反映するものであるが、飾り灯笼の減少は、初盆のしつらえがイエだけで執行できるようになったことを示している。

第4章 付き合いからみる初盆のイエの盆行事の変化

第1節 棚参りの変化

本節では、棚参りの区・組内の付き合いの変化を通じ、初盆のイエの盆行事の変化を考察する。主な変化はこの40年間に集中しており、それを表4にまとめた(表4)。次に表4の内容を参照しながら、ムラ・組・初盆のイエ同士の付き合いの変化を見ていく。

表4 棚参りからみる付き合いの変化

年代	棚参り
1804 ~1831年	十三日に、一統墓所へ詣て、それより新霊のあるイエへと弔う事也。初盆の棚参りと云(竹内など編 1969 655)。
1964年	記載なし(国学院大学民俗学研究会 1964)。
1977年	12日に初盆のイエでは、供物の七品を同じ組のイエからもらって供えることがほとんどであった。13日にムラ中の人が拝みに来る(原1977)。
約1985年	1985年前までは、棚参りに来るムラの人々が人が多かった。初盆のイエに入りきれなかった。13日から15日に外でテントを立て、椅子を準備した(2014・筆者聞き取り)。
約1995年	以前区内の団体、区役員、寺役員は全部初盆のイエに棚参りをしたが、約1995年ごろ、寺役員しか棚参りにしなくなった。一般のイエが棚参りに来ることはまだ自由である(2014・筆者聞き取り)。
約2005年	2005年に初盆のイエの寄合がはじまり、祭壇作りは質素に作るうと制限され、区内の棚参りは廃止、組内の棚参りも少なくなった(初盆家申し合わせ事項表を参照)(2015・筆者聞き取り)。
2015年	区内の人々は来ない。浄願寺の住職が棚経に来る時、区役員と寺役員が一緒についてくる。これを棚参りとする。近所の人々は棚参りは来るが、親戚が中心である(2015・筆者聞き取り)。

第2節. ムラ内の付き合いの制限

多羅尾では、ムラの人々が13日に初盆のイエへ棚参りに行くことは江戸後期に見られる。1995年までは、ムラ内の棚参りは盛んであった。1985年ごろには、区役員、区内の各団体、寺役員、一般のイエの人々が棚参りに来るため、人数が多く、座敷に入れなかった。初盆のイエでは、8月13日~15日に庭や屋敷地内でテントを立て、椅子や茶を用意し、室外で棚参りに来る人々を接待した。その時に、棚参りに来る人の制限はなかった。

しかし、1995年ごろ、区役員、区内の各団体が棚参りに来るようになった。2005年ごろ、区内の一般のイエからの霊前は辞退されるようになり、初盆のイエでは、棚参りの返しもしないことになった。区役員の棚参りは廃止され、ムラの付き合いは制限されるようになった。

第3節 組内の付き合いの自由

組内の付き合いは、棚参り以外に、供物の用意や飾り灯笼の準備などに及んでいた。以前、初盆のイエの精霊迎えは組内の近隣を呼んで一緒におこなったが、2005年ごろ制限されるようになった。棚参りの組内の付き合いは制限されていない。アラボ

トケの祭壇を組内の近隣から貸出してもらうこともみられる。組内の付き合いは自己判断によるものなので、まだ自由である。

第4節 初盆のイエ同士の提携

2005年にできた初盆のイエの寄合では、初盆のイエ同士の合同活動がみられる。初盆のイエでは、初盆のしつらえの礼儀作法が統一されるようになった。それは主に経済面に表されている。表2を参照し、経済に関するものは次のようにまとめられる。

- ①初盆イエ一同で寺へ盛籠1対を出す。
- ②初盆イエ一同で各初盆のイエに来る詠唱講(念仏団)へ礼金を出す。
- ③地藏盆に、初盆イエ同士は寺へ盛籠、布施の総金額、詠唱講への礼金を出す。
- ④地藏盆に初盆のイエ一同で灯籠1対を寺に奉納する。
- ⑤初盆イエ同士では相互に供えと霊前はしない。

8月24日夜の初盆の灯籠供養会では、すべての初盆のイエの遺族が本堂に集まる。以前は、各初盆のイエは、祭壇の飾り灯籠を浄願寺の本堂まで持ってきて供養したが、現在では飾り灯籠を飾るイエが激減した。2015年には11軒のうち、2軒のイエしか飾らなくなった。寺の初盆の灯籠供養において、その2軒のイエの飾り灯籠は、初盆のイエ同士が共同的に供養するものである。以上の内容からみると、初盆のイエ同士は提携していることがわかる。

第5節 親戚との付き合いが中心

多羅尾では、初盆をおこなうイエは親戚に手伝ってもらうことが多い。8月12日に親戚が来て遺族とともに祭壇を完成させる。13日～15日に棚参りに来る人々の接待を手伝う。「初盆申し合わせ事項」(表2)のように、区内・組内の付き合いは制限されることが多いが、親戚の付き合いには制限がない。飾り灯籠を自分で作ることは禁止されるが、親戚からもらうことは禁止されていない。

区内の棚参りと祭壇の周辺の装飾物の数、霊前と返しに制限され、初盆は次第にムラ・組の力を貸さなくなった。イエの盆行事では、親戚との付き合いが中心となった。

第5章 おわりに

本章では、イエの盆行事の性格を明らかにするこ

とを目的とし、多羅尾の初盆のイエの盆棚の作成、装飾、処分、また周辺との付き合いなどの活動を例に、近年のイエの盆行事の変化を考察した。その結果、次のような結論を得ることができた。

(1) 祭祀場所の室内化

盆棚の設置場所は室外から室内へ変化し、イエの精霊供養の場が室内化しつつある。

(2) 祭祀対象の明確化

新仏のシンボルが位牌+遺影+遺骨に変化したことは、イエの祭祀対象の限定化を示している。死者祭祀としての性格がさらに明確化された。

(3) 装飾物や供物の商品化

盆行事に関する装飾物や供物が商品化されている。盆棚の使用には、以前は自分で作ったり、隣人から貸出してもらったりしたが、次第に葬儀会社によって商品化されるようになった。その結果、ムラ・組の手伝いや労働力の交換が必要でなくなった。装飾物や供物の商品化によって、イエの経済力が優先的に考えられるようになった。

(4) ムラの互助機能から分離され、初盆のイエ同士の提携へ

ムラの付き合いの制限と組の付き合いの自由により、イエの盆行事はムラ・組の互助機能から分離されつつある傾向がみられる。それとともに、初盆のイエ同士の提携がみられるようになった。

(5) 親戚と親交がある隣人との付き合いが中心に

ムラの互助機能から分離されるかわりに、親戚と親交がある隣人との付き合いが中心となった。親戚と親交がある隣人が中心となる傾向については、経済、労働力の交換だけでなく、精神的な面の互助を続けていることがうかがえる。親戚や親交がある隣人が初盆のイエに集まり、死者に対する思慕や思い出などを遺族と交わし、精神的な援助が中心となっている。

近年、イエの盆行事ではさらに死者祭祀としての性格が明確化されている。経済力の成長によってイエの死者祭祀にはムラ・組の力を貸さなくても済むようになった。イエの盆行事の祭祀対象がイエの死者にまで明確化されたことにより、死者との絆が明瞭である親戚と親交がある隣人との付き合いが中心となったことが、本研究によって明らかになった。

注：

- (1) 盆棚とは、盆の時期に精霊祭りのために特別にしつらえられたすべての祭壇であり、仏壇も盆棚に含まれると高谷が述べている（高谷 1995 5～6）。本研究で取り上げる盆棚には仏壇を含めない。
- (2) 『先祖の話』は柳田國男が1945年（昭和20年）に執筆したものである。1946年に単行本として発行された。本研究が参考した『先祖の話』は『柳田國男全集』13 1990 筑摩書房に所収されている。
- (3) 柳田國男が述べている先祖・新精霊・外精霊は、後に本仏・新仏・無縁仏として解釈されている（『日本民俗大辞典』下 2000 658）。本研究では、この三種類の精霊を先祖・新仏・無縁仏と呼ぶ。
- (4) 全国各地からの答は23か所が残っている。多羅尾に関するものは「近江國多羅尾村風俗問状答」である（竹内利美・原田伴彦・平山敏治郎編 1969）。
- (5) 多羅尾の盆行事の資料の出典は次の通りである。資料①は「寛延三年改多羅尾年中行事」元庄屋佐野家文書 杉原信一氏提供 原良輔 1977 『多羅尾の民俗』中京大学郷土研究会 P68～72。資料②は竹内利美・原田伴彦・平山敏治郎編 1969 「近江國多羅尾村風俗問状答」（『諸国風俗問状』）『日本庶民生活史料修集成』第9巻 風俗 三一書房 P653～658。資料③は国学院大学民俗学研究会 1964年初版1976年年刊（再版）『民俗採訪』「青森県下北郡東通村尻屋ほか・滋賀県甲賀郡信楽町多羅尾・福島信夫郡飯坂町茂庭」国学院大学民俗学研究会 P64～65。資料④は原良輔編 1976年 「多羅尾の民俗」『中京民俗』第14号 中京大学郷土民俗学 P64～66・P73～74・P77・P98・P121・P184。⑤は筆者が2014・2015年に現地調査をしたものである。
- (6) 1615年に多羅尾家15代信楽の領主、多羅尾光太の夫人が病気のためなくなった。光太は夫人の菩提をとむらうために浄願寺を建てた。後に多羅尾家の代々菩提寺となり、格式の高い寺であった（杉原 1985 63～64）。江戸時代に浄願寺には宗門帳という戸籍簿があり、村の百姓の戸籍を取り扱った（杉原 1985 74）。現在、浄願寺は150数軒の檀家を有し、うち約130軒は多羅尾にあり、ほかの檀家は信楽町内の各地区に分布している。

- (7) 多羅尾には、五瀬組・大沢組があったが、以上の6組とは離れているうえに中心が西部に移ってしまったため、昭和45年ごろから一軒ずつ離村し、現在では一軒も住んでいない（原編 1976 8～9）。
- (8) 江戸中期頃までは、多羅尾は両墓制ではなく、各イエの側に墓があったという。（原編 1976 98）。多羅尾では、十数年前から火葬となり、サンマイは埋葬に使われなくなった。サンマイはイエごとに区画されている。年忌や彼岸、盆行事などに墓掃除、墓参りをする。
- (9) 写真1・2・3の砂台は元区长高畑家で取材したものである。以前、各イエでは、川辺や庭、井戸の近くに砂を使って台にしたが、現在、コンクリートの塊やレンガ、石、覆わせた壺や桶などが使われている。砂台の祭祀対象はそれぞれであるという。川辺の砂台は川の仏をまつり、庭の砂盛りは屋敷仏を、井戸の砂盛りは水の神をまつるといふ。
- (10) 仏壇と砂台に供えるものは別々に作られる。仏壇から下げた供物を砂台に供えることはしない。
- (11) 多羅尾では、昭和28年（1953年）8月15日早朝に甚大な水害が発生し、44名の災害死者が出た。中央の山にあるサンマイが土砂に覆われ、災害死者のために別の場所に墓地を設けた。この昭和大水害の災害死者の墓地はサンマイの裏山にある。平成4年（1992年）に多羅尾自治区では、昭和大水害の災害死者の墓地が整備され、死者ごとに墓標が立てられた。仏教婦人会の会員らが毎年8月はじめに災害死者の墓地を掃除する。昭和大水害の後、多羅尾では、毎年8月15日早朝にムラ全員が大戸川を清掃していたが、近年、清掃の時間は7月に変わった。
- (12) テントの中に吊るしている提灯は、以前は手作りであったが、現在はスーパーから購入する。以前は精霊を送る時に川に流されたが、環境汚染になるため、数十年前から流さなくなった。後に地藏盆に寄付することになった。
- (13) 初盆のイエの寄合は約10年前にはじまった。毎年盆月に入る前に開催される。初盆のイエに配慮し、毎年開催する時間が違う。2015年は7月中に、2014年は6月中に開催された。
- (14) 表2は2015年多羅尾の初盆寄合の配布資料「平成27年度 初盆申し合わせ事項」によって作成した。初盆のイエの遺族に提供されたものである。

- (15)戒名提灯は、写真17の中の細長く戒名を入れたものである。
- (16)飾り灯籠は、写真17の外側に吊るしている格子模様が入ったものである。木の枠組に鮮やかな張り紙で張り、下の部分の紙は長く垂らす。祭壇の両側に飾られる。それは多羅尾の初盆の特色である。
- (17)表3の出典について、資料②は次のとおりである(竹内など編 1969 655)。資料③は次のとおりである(国学院大学民俗学研究会 1976 再版 64)。資料④は「新盆」という写真(原 1976)、また次の内容である(原 1976 73～74・98)。1955年の内容は筆者が2015年に聞き取りした内容であり、1953年に昭和大水害が発生し、その直後の盆行事を話者に聞いた。
- (18)「多羅尾の民俗」『中京大学』第14号の「新盆」という写真を参考したものである。(原編 1976)。

参考文献：

- ・伊藤唯真 1995 「盆棚と無縁ボトケ」『仏教民俗の研究』伊藤唯真著作集第3巻 法蔵館 所収、初出1978
- ・喜多村理子 1988 「盆に迎える霊についての再検討—先祖を祭る場所を通して—」大島建彦編『無縁仏』岩崎美術社 所収、初出1985
- ・国学院大学民俗学研究会 1976年再版『民俗探訪 青森県下北郡東通村尻屋ほか・滋賀県甲賀信楽多羅尾・福島県信夫郡飯坂町茂庭』国学院大学民俗学研究会(1964年初版)
- ・甲賀市史編さん委員会 2009 『甲賀市史』第6巻民俗・建築・石造文化財 甲賀市
- ・滋賀県信楽町多羅尾区編 1989 『多羅尾村 昭和大水害誌』信楽町多羅尾区
- ・杉原信一 1985 『多羅尾の歴史物語』多羅尾郷土史研究会
- ・杉原信一提供 「寛延三年改多羅尾村年中行事」元庄屋佐野家文書 (原良輔 1976 「多羅尾の民俗」『中京民俗』第14号 中京大学郷土研究会 70)
- ・高谷重夫 1995 『盆行事の民俗学的研究』岩田書院
- ・高谷重夫 1988 「餓鬼の棚」大島建彦編『無縁仏』岩崎美術社 所収、初出 1985
- ・竹内利美・原田伴彦・平山敏治郎編 1969 「近

- 江國多羅尾村風俗問状答」(「諸国風俗問状」)『日本庶民生活史料修集成』第9巻 風俗 三一書房
- ・多羅尾の初盆寄合の配布資料 2015「平成27年度 初盆申し合わせ事項」(初盆のイエによって提供された)
 - ・原 良輔編 1977 「多羅尾の民俗」『中京民俗』第14号 中京大学郷土研究会
 - ・福田アジオなど編 2000 『日本民俗大辞典』下 吉川弘文館
 - ・最上孝敬 1984「無縁仏について」(『靈魂の行方』名著出版 所収)初出1960
 - ・最上孝敬 1988「盆の祭り」(大島建彦編『無縁仏』岩崎美術社 所収)初出1975
 - ・森 隆男 1996「仏壇の登場」『住居空間の祭祀と儀礼』岩田書院 所収)初出1989 原題「仏壇と盆棚の間」
 - ・柳田國男 1990 『先祖の話』(『柳田國男全集』13 筑摩書房 所収)初出 1946

謝辞：

2012年5月に信楽駅で自転車を借りてはじめて多羅尾を訪れた。静かできれいな山村で、ムラの人々が非常に熱心であったという印象であった。2014・2015年に車を運転して何回も多羅尾を訪れ、多くの方々に盆行事の話を教えていただいた。宿泊場所をご提供いただいた田中澄朋様ご一家をはじめ、浄願寺の長谷川善隆住職、元区長の高畑啓司様、郵便局の高崎久美子様、また多羅尾区公民館の職員様など、ムラの方々から温かくご支援いただき、拙稿をもって深く感謝を申し上げます。